

昭和二十四年七月二十三日
 第三種郵便物認可
 発行(毎月一回・十五日発行)

(通第三五五号)

慈

光

第三十卷

第十一号

次

目

聖人に親炙して……………池山栄吉……………(1)

静けさとほほえみ……………川畑愛義……………(7)

自照日誌抄(六)……………西元宗助……………(13)

念仏詩抄……………木村無相……………(16)

向島諦宣師を悼む……………花田正夫……………(19)

撮取不捨……………石田十九三……………(21)

63231
 ① 木と火
 (13)

信仰は若いから得られない、老人だから得やすいということはない、男女老少を問わず信仰は得られる、しかもまた得にくいものである。私は皆さんにおたづねしてみたいと思う。―皆さんはこの会館（芦屋仏教会館）の設立の趣意である信仰を得られておいでですか。皆さんは開祖親鸞聖人にじきにお会いになったことがありますか。聖人は七百年前の方だからお会いできないと言われるのではもの足りない、是非お会いしなければならぬ。信仰は信ずる人とお会いすることである。信仰の道をたどっている以上は、一度は聖人にお会いしなければならぬ。そうでなければ信仰は得られない。ではどうしたらお会いできるかをお話してみましよう。歎異抄の第一章を拝読してみますと、

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をば遂ぐるなりと信じて、念仏申さんとおもいたつ心のおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたもうなり。弥陀の本願には、老少善悪の人をえらばれず、ただ

苦しむ人は会いたくて仕方がない。言葉通りそうだということよりも、その言葉に盛りきれぬほどに罪悪深重にくるしむからである。

そう考えると、聖人にお会いなさったかという問いは、貴方は自ら罪悪深重、煩惱熾盛の身であるという見きわめがついて居られますか。と言いかえることができる。如来はわれわれに信仰を与えたくて仕方がない。けれどもわれわれの方で欲しがっていないのだから獲られないのである。

それで今度は吾々人間は、どうしてもそうした自覚を余儀なくされるものであることをお話しておきましょう。

私が聖人にお会いしたその体験から割り出してお話すると、我々はつねに満足を欲求している。然し、いつも満たされぬ望みがあって、それがかなわぬ―そこから苦しみが起る。一生もがいてつとめる、どうぞ自分の望みをかなえたい、満足が得たい―我々のすることなすことみなこの欲望からくる、その外に何も無い。金を得たいと云う人は一生懸命にそれを求める。そして運よく金を得る人がある。名を知られる人になりたい、うまくゆけば、かなり有名にもなれる。その他地位を得たい、権勢が得たい―いずれもある程度まで得られましょう。しかしそれらが得られて満足して居られるか。かつて自分の望んだことを得て、それ

信心を要すと知るべし。その故は罪悪深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にたまします。

しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なき故に。悪もおおるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえにと云々。

「その故は罪悪深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にたまします」。第一章を拝読すると、頭にピンとくるのが今の一節です。これが即ち弥陀の本願、本の御希望である。

われらが親鸞聖人にお会いしたいという希望がどうして起るのか。別にわけではないが、信仰を獲ておいた方がよいからというのではつまらぬ。それでは信仰を与えたくとも与えられない。何が得られなくとも、先ず信仰が獲たいというまでに願望が熟してこなければ駄目がある。

七百年前の人に会いたい―これ奇蹟である。何故に会いたいのか。もともと弥陀の本願に罪悪深重、煩惱熾盛の衆生を助けんためである。この罪悪深重、煩惱熾盛の自分に

で究竟の満足を得ている人があるか。

中には真の満足でないものを、満足だと自らあざむいている人もある。正しい方法によらないで、満足を得たいという人は大抵これである。

こうした普通の満足と、もう一つの満足と比べてみる。自己をよくしよう、外のもので自分を飾ろうとするのではなく、自分の人格をよくしようとする。そういう満足と前の満足をくらべて、どちらが貴いものであるか。人も二十歳前後にもなれば、幾分そうした問題を、経験的に考えておられるであろう。

金や地位よりも、自分の人格が向上している、という満足を感ずるに越した喜びはない。人格の向上を実現することが出来たならば―自分の欲するままに善でありうるようになれば、これに越した真の満足はない。その他の満足は従たる満足である。内なる自分をよりよくするための手段としてのみ、外なる満足は意味がある。間接に内なる満足を得るに役立つという点においてのみ価値がある。

昔から道を求めた人々は、自分を一步でも仏の境界に近づけたい、というのが願であった。内なる満足を求めるときのみはじめて人間としての道を歩むのである。親鸞聖人はそれを専ら求められたのである。ところで、それがうま

く行くかというのが問題である。歎異抄の第二章に、

念仏はまことに浄土に生るるたねにてやはんべるらん
また地獄におつる業にてやはんべるらん、総じてもて存
知せざるなり。たとい法然上人にすかさされまいらせて、
念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候
その故は、自余の行をはげみて仏になるべかりける身が
念仏を申して地獄にもおちて候わばこそ、すかされたて
まつりてという後悔も候わめ、いずれの行も及び難き身
なれば、とても地獄は一定すみかぞかし、

とある。聖人は向上の一路に専心、心をはげまされたけれど、とても登り得ない道であったと。遂に「とても地獄は一定すみかぞかし」、「まことによくよく煩惱の興盛にそうろうこそ」となられたのである。

真の満足を求め進んで、それが達せられない。そこで始めて罪悪深重、煩惱熾盛の衆生ぞとの教えに入られたのである。真面目に人生を渡ろうという人は、おそかれはやかれそこらぶつからざるを得ない。

人に出会う度に礼拝された人がある。常不輕菩薩という方である。その人はどこを見てそうしたのであろう。例えば私が人に対してそうすると、はたから見て狂人のよう

それから信仰を得るのに絶対に必要とまでは、純理の上からは云えないかもしれないが、事実上そうでなくてはならないのは、善知識に会うということである。信仰上絶対に信頼し得る人を獲ることである。その善知識は現に生きていて人でもよい、貴方がたの中の一人が善知識であるかも知れぬ。また百年前の人でもよい、三百年前の信者の言行に感じて、その人が善知識になるとしてもよい。

私の善知識は誰か。私を信仰の方へ近よせてくれたのは、母や、友人、あの近角常観という人などであるが、信仰に引入れて下さった直接の人は、七百年前の親鸞聖人である。七百年前の人にどうして会えるのか。私は貴方がたに質問します—貴方がたは人間を見ることが出来ますか。出来るという人は、まだ人間を知らぬ人です。人間は眼で見えるものではない。鼻があり、口があり、しかしかの形をしている、それは人間ではない。或事を感じ、欲し、考える、それが人間である。人間の形は人間ではない、人間の考える、それが人間である。

七百年前に親鸞聖人の前に坐ったとしても、聖人を拝める人もあるし、拝めない人もある。聖人の御心の幾分を解し得て、そうでしたか、私もそうさせて頂きましょう、となられた人が聖人にお会いした人である。七百年後の今日でも、心と心と通って、じかにお会いできるのである。信

ある。石には精神があるかないか分らないが、恐らくないであろう。鳥、鳥にはありますね。私が住吉の御影に住んでいた時分カナリヤを飼っていた。私がそばへゆくとチュウチュウと嬉しそうに鳴く、はてなと思つて近づくとさも嬉しそうに、ピョンピョンはねまわつて鳴く。私は餌をやつたことはないが、私に対して親しみを持っている。私も可愛い奴だと思ふ。心と心が通うのである。かつて猫のお話をしたことがある。猫にも心がある。犬にはなおさらである。併し、それらは、あれが欲しい、これが欲しいという願はあるが、心をよくしたいという願は人間にしかない。この心があるのではじめて人間である。地位、財産のみを願っている人は、人間の人間たる価値がない。人間としての真の価値は、自分の心をよくしたい、仏にまで近づきたいという心がある点にある。常不輕菩薩が礼拝されたのは、人がそういう心を持っているからである。

人格を向上したいという願は本当に貴いものだ。吾々と仏との間には五十二段もの階段があり、非常なへだたりがあるが、いつか一度は仏に辿りつく可能性はある、それが貴いのである。如来が吾々を救おうとされるのは、吾々のよりよくなりたいという心を手がかりとされるのである。一切衆生ことごとく仏性を有すとは是である。

仰の上で、心と心が通う—それが信仰である。聖人を通じて、法然、善導、天親、龍樹、釈尊、十劫の昔からの弥陀如来と、心の通うことが信仰である。

然らば、どうしてお会いしたか。

私は元來偏屈にできている。疑い深い、意地が悪い、絶対に人を信ずるということができない性分である。若い時分から英雄崇拜などということができなかった。ところが妙なことには、宗教というものは馬鹿にできぬと考えていた。宗教の中でも仏教、仏教の中でもことに真宗の信仰が最も純粹で、すべての信仰を、つきつめていった最高のもの、という考えは動かさなかった。他のことには疑い深かったが、真宗の信仰の体現者は親鸞聖人であり、聖人がその信仰を体験されたままに述べられたのである、ということとは疑えなかった。

私が出にくかった念仏が出たのは四十二歳の時である。私の行詰りは善悪の問題であった。人によってはいろいろあるが、私にはさっきの善悪の問題である。或事で自分がよくなりたいと思いつつ、よくなれなかった。悪いと知りつつどうすることもできない。私には心が自由にすることができない、こんなことでは目的のはたしようがない。目的のない人生、これほど淋しいものはない。自分はどう

したらよからう。何のために生きているのだろう——五里霧中、足をふみ立てる所がない、生きてゆかれたものではない。私はその時、こうした時に信仰が欲しいなと思った。どこにも光が見えない、まっくらがりだ。切に信仰が求めずにいられなくなった。

その時、第二節の「親鸞におきては」の御文を思い浮かべた。それまでに読んだり、聞いたりしていたが、体験的にそうだなと思っていなかった。その御文は、

親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらずべし、とよきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり

であった。よきひと——即ち善知識である。それ、ここに信仰にはいる献立がちゃんとできている。おのれのなんともならぬ身ということ、そしてまた「よき人の仰せをこうむりて」という善知識の準備ができている。聖人は私にとって善知識である。私はその御文に、ぐっと引きずりこまれるように感じた、その途端ああそうかと感得したことがあった。

聖人は「親鸞におきては」と言っておられる。親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらずべしとよき人の仰せをこうむりて信ずる外に別の子細なきなり」「あなたはそうでしたか、じゃ私も」この骨です。この心

深重の衆生をたすけたための願でしたか「南無阿弥陀仏」となる。念仏の出ない人は御用心なさい。しかし念仏が出たからとて、信心を獲たのではないかも知れぬ。聖人のお心が私の心になり、私の心が聖人の心になると、念仏せずにおれなくなる、不思議なものです。

聖人を真似るのに二通りの仕方がある。聖人が仏前で如何にもつましく合掌念仏して居られるとする。そのお姿を真似して自分も合掌念仏する、これは外的の真似方である。「ただ念仏して……」というお言葉を頂いて自分も聖人と同じ心で念仏する、これは内的の真似方である。外的の真似をしておれば、いつか内的の真似もできるようになる。このことについてはもっと詳しくお話ししたいが時間がないから次の機会にゆずりましょう。心理学上から言っても、絶対に信頼する人の判断は、そのまま自分の判断となり、その人の希望は自分の希望となるということは動かせない。聖人を絶対に信頼すれば、おのずから自分の中は空っぽになる、その人の考えを聞かせてもらえば、それがそのまま自分の考えとなる。かくて始めて聖人にお会いできる。聖人にお会いすることは、法然上人にもお会いし、善導、天親、龍樹、釈尊にも会い奉ることであり、現に如来を拝見することである。願わくばすでに信仰を獲られた方

持であの御文を味われば、現前当来遠からず、必ず聖人を拝見できます。「私におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらずべしと、よき人、親鸞聖人の仰せをこうむりて信ずる外に別の子細なきなり」すると今まで恥かしくて出にくかったお念仏が堤が切れたように出てきた。それまで自分は信託家をもって任じていたのにお念仏が申されなかった。その時はじめて親鸞聖人のおこころがわかった。わかったのは「ああそうか」ということである。

さつきカナリヤのお話をしたが、カナリヤが私に呼びかける、私はカナリヤが私を呼んでるなと感ずる、これが感入である。皆さんの中で、大変真面目に聞いておられる方が、喜んで聞いておられる方が、私の方で、あの人は真面目に聞いていられるな、あの人は喜んで聞いておられるなと感ずる。心と心がそこに通じるのである。じゃ死んだ人とはどうか。死んだ人は、多くの場合、言葉そのものがその人である。その言葉を聞いて「じゃ私も」とその言葉を真似するのである、その言葉の中に入るのである、それで与えられるのである。聖人のお心が私の心になり、逆にまた妙な言い方ではあるが、私の心が聖人の心になる。感入であり、共感であり、共鳴である。

「ただ念仏して」いかにもそうですね。煩惱熾盛、罪惡

はしばらくおき、未信の方は、是非聖人にお会いしていただきたい。お会いするには「じゃ私も」「私におきては」など、上にのべたことが参考になるでしょう。

「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらずべしとよきひとの仰せをこうむりて信ずる外に別の子細なきなり」というのは、単なる信仰の告白ではない。単なる「独り語」ではない。「私はこう信ずる、お前方もこうしてはどうかな」とおすすめて下さっているのである。

これは最近に気づいたことである。信仰の告白には一種異常な力がある。それは痛切に感入をうながす。だからあの御文は獲信の上に絶大の加威力を有する。あの御文は熱い思いをこめての御すすめであるとただかねばならぬ。七百年前から呼んで下さったお声に気づかなかったのは、私共の求め心が切実さを欠いていたからである。どうぞ一刻も早く、「ああそうだったか」と共鳴するところに落着いていただきたいものです。

『仏と人』より

静けさとほほえみ

川 畑 愛 義

註・京都高倉会館の日曜講話で「ともしび」に紹介されたものであります。昭和五十二年十二月十一日。

池山栄吉先生

今日は「静けさとほほえみ」、そういう題でしばらくお話をさせていただくわけでございますが、なぜこういうような題を選んだかという点、自分が落ちつきのない、まあいわばおっちょこちょいで、そして軽卒でざわざわした人間である。そして何となしにそういう「静けさ」と「ほほえみ」というような、そういう世界に自分が憧れているんだなあ、こう思います。まあ初対面の人からでも、君は苦虫を噛みつぶしたような「な」とよく言われます。いつでもなんとなしに神経質そうな顔をしているらしい。そういうなかで、私が教えをうけた池山先生は、お体でもって「静けさ」と「ほほえみ」を漂わせたような、そういう先生でございました。

私は池山先生にご縁がありまして、先生が京都にいられてからずっとみ教えをうけましたが、あの蓮華谷の高い山と、「仏々相念」ということがございますが、どうも先生は、そういうような境界に遊んでおられるような感じを受けました。

先生がお亡くなりになって、誰いうともなしに、それこそ自然に、先生の号を取りまして、一道会というものが生まれました。しかもまことに不思議な縁といえますか、その一道会の会場になっているのが嵯峨の浄住寺―禅寺でございます。そのお世話をしているのが榊原徳草師、もう宗派を超えてですね、先生の何ものにもこだわらない、そして形式を超えたあの先生のお徳が、先生はしみこみという事も仰言いました。人びとの中にしみこんで、亡くなられてから今年で四十年。たしか昭和十三年の十一月八日にお亡くなりになっております。もう亡くなられてから自然にですね、誰いうともなく、どっからともなく一道会が誕生しまして、年々盛んになる。これは、ただならぬ事じゃないかと思えます。

お育てをいただいて

先生は「仏と人」との中にも書いてございますが、非常に動物を愛されました。例えばワッハアンという番犬、それを大変可愛がられました。庭に出て日向ぼっこをしておられますと、この犬がどこからともなく現われて、先生の左の方へかしづくといいますが、ひざまずく。先生が左の

の中でですね、あの応接室で二人だけでお会いをしておりますと―先生は何も仰言いません、そして私も申しあげることございません。静かにこう、二人であい向っておりますと、あの先生のお体からなんということなしに、もの静かな、やさしい、そういうようなもの。そのうちに先生は、ほんとに自然（じねん）に口を動かされて―それがお念仏でございます。そうしたその前後というもの―ああいうまあ「きよらか」というか「ほほえみ」といいますか、にっこりとされたようなご風貌。世の中が騒然として、本当にけわしいといいますが、末世というようなものを感じずるなかに、あのようなもの静けさ、やわらかさ、触光柔軟（そっこうにゅうなん）柔和忍辱（にゅうわんにんじく）という言葉もございますが、それを身をもってお示しいただける方が大変少ないように思います。それだけに有難い先生だったなあ、とこう思うわけです。一寸ことばがオーバーになるかも知れませんが、先生の永遠の静けさというようなもの、そして自然のほほえみというようなものに接す

手を軽く犬の頭の上へ置かれると、心なしか、その番犬が半眼を閉じて、いかにも満足したように―まあ私の言葉が不適當かも知れませんが、恰も犬が禪定に入るといいますか、瞑想に入るような―そういう満足。なんとも言えない、そういう風景を時々お見受けしました。

またカナリヤがいましたが―そのカナリヤが、先生が近づくくと喜びの讃歌をあげる。で、カナリヤのことだから餌が欲しいんだろう、それで鳴くんだと家の者がそういう。次女の愛子さんが負け惜しみで、近づいて見るが、カナリヤは一向に鳴かない、嬉しく羽ばたかない。先生が近づかれると、いかにも嬉しそうに鳴くのです、自然にですね、自然の歌をうたう。これもまた、たいしたものだなと私はそう思うわけであります。アッシリーの聖フランシスではないけれども、本当に先生にそれをまのあたりに見ました。やっぱり、えに言われぬものを先生はもっていらっしやるなと思えました。

それからまた、先生の事をもう一つだけ。私は、実はいつとはなしにですね、池山先生のご病気になられた頃から先生のお体を診る―そういう大変なことになったわけです。段々お体が弱られる。私はその頃京大にいたのですが、先生がいつ危くなるかも知れないというので、居を大学の近くから移りまして、蓮華谷の山の近くに引っ越し

ました。どれだけ若い足軽だつてですね、家を引越すのはやっぱり大変です。私のようなエゴ一辺倒の者、そして我儘の者が、家を引越してまで先生のお近くへ行くという事は、今から考えてもこれは不思議な縁だつたと思うし、あそこまで私をお育ていただくという縁がですね、なみなみならぬ、とっても有難い、得難い、本当に言葉では言えないものがあるんじゃないかと思えます。そしてご臨終の場に、私たち夫婦が付き添うというような、まことにまれな勝縁に私は立たせていただきました。

先生から、何か珍しいものがあると、お招きをうけたり、お届けものをいただいたことがありました。ある時、
「虫の音が良いから聴きに采ないか」と、こう仰言った。蓮華谷のお宅で聴く虫の音というものはまた格別のものがございます。コオロギとか鈴虫とか、くつわむしだとか、私の知らない色々な虫が、それぞれの音をです。ことに森羅万象というものがそれに和して、それぞれの命を謳っている。この虫の鳴き声というものが、本当にこれは天地の大合唱、大自然のコーラスでございます。そういうような耳をお育ていただいたことも、ありがたいと思えます。まあその一つの中に、私は「かんたん」の虫の歌を作ったことがありますので、ちょっと披露いたしましょう。せつせつとただひとすじに夜もすがら 生命をうたう

ことはなかなか難かしいです。そのうちほんの一、二例をあげますと、卒中があります。それになりますと、まあ普通は安静にして一寝かせて、その後はリハビリというものが、今までの医学でございました。卒中の中には、血管が詰まる場合と、それから血管が破れて血が出る場合があります。それで全く治療法が違うわけですね。その破れたのか詰まったのかというどちらにしても、それから先は血が流れて行きませんから、半身不随がおこるとか、あるいはやがて脳軟化になるとかいう現象が起るわけです。然し、最近進んだ設備をしたところでは、すぐにそれが分かって、頭を開いてすぐに手術をすれば非常に直りが早い。それを最近の医学では、一寸むつかしい言葉ですけれども、コンピュータートモグラフィ・スキャンニングというようなことと言っております。簡単に言いますと、脳の断層をずーっとレントゲンの写真を撮りますと、そのX線の減衰(力)像をコンピューターに接続します。それで、どこでどの血管が破れているのか、詰まっているのかということなどを診断します。そうして、頭蓋骨を開けて、その詰まったのを開けて、とれるところがあつたらそれを取り出せばよいわけです。破れたところはその血管を縫うわけです。決して簡単ではありません、それをやりますと治りが非常にはやい。

かんたんの虫

歌にもならないと思うんですけども、先生を思いおこして懐かしく思う次第でございます。

医学の進歩と、死への戦い

先程申し上げましたように「静けさとほほえみ」というものが、現代に求められ、あるいは現代における一つの目標になるんじゃないかと私は思うわけです。しかし、我々はそのすれば、あわただしさや、雑踏の中にこれを見失うんですが、人生最期の静けさ・ほほえみというのは、やはり生と死を越えた、そういう世界で得られるんじゃないかと思えます。どんなに私がここでつくろひの静けさとほほえみを出そうとしたところで、今ここで、私よりも死ぬるんじゃないかと思えますと、そういうものもたちまた消えてしまいますね。そういうものじゃなくて、もっと永続きのする、ほかの言葉で言い換えたならば、永遠の静けさ、そういうものがどうしたら得られるかという問題について、今日ご一緒に考えていただけたら有難いと思えます。

医学は、結局死への戦いだと思えます。まあ限りある生命ですけれども、これを襲うところの死をどうして克服するか、と云う問題に立ち向かっているわけでありまして。医学は、本当に驚くべき速度で一日一日進んでおりますし、私ごとき者が、自分の専門の領域でも、これについていく

それからもう一つの例をあげますと、胃癌ですね。癌はよく治らないといえますけれども、早期のものでは、比較的よく治ります。特に初期の粘膜炎のような時に分かれますと、大抵は助かります。もう殆んど全部助かるといつてもいいくらいです。昔は胃カメラなどというものがあつたのですけれど、この頃はファイバースコープというものを使得まして、上から胃の中をのぞきますと、転移がおこるとか末期症状になるということがございます。これも医学の一つの進歩だと思えます。

もう一つの例を云いますと、最も小さいものは、即ちバクテリア、これは光学顕微鏡でしか見えないもの、これよりもっと小さいもの、それは電子顕微鏡でしか見えないもの、これをウイルスと云っていました。ところがある医者は、このウイルスよりもっともっと小さいのを見つけた。死んだ人の肉を食う食人種がいます。これは、親愛の情をこめてその肉を食べるんだそうですが、食べる時にその病原体も一緒に食べてしもうて、十年、二十年経つてから発病する。発病したら絶対に治らないと一こういう奇病があるわけです。で、これをよく調べたら、ウイルスよりも、もっともっと小さい一普通は核酸の上に膜があるので、その膜を破らない一核酸そのものである。これを見つけて、ウイルスでなくウイロイドという名前と呼ん

でいます。そういうことに引き続いて、この頃はまた生命というものの、遺伝子の操作や試験管ベビーまで行われるようになりました。

半健康化の現象・価値観の転換

それでは、人間の寿命とか健康とか体力づくりというのがどんどん進んでいるかという、決してそうではございませんですね。例えば、昭和五十一年度の国民総医療費は七兆七千億円。これを一家四人の標準世帯にしますと、どの家も二十七万円かかっている。しかもその伸び率は、前の昭和五十年に較べて二十パーセントの伸び率です。国民総生産—GNPは、十二パーセントしか伸びていません。即ち十二パーセントの約倍ぐらい医療費が増えている。では国民が健康になりつつあるかという、決してそうではございませんね。例えば、労働省の一昨年調査によりますと、元気で働いているはずの—国民の勤労者の約七割の者が、非常に疲れやすい、健康に不安をもっている、そういうことを訴えております。そして全体の約三十パーセントの者が、なんらかの持病—慢性病を持つておると。他にもいろんな例がございますが、これが最近いわれるところの国民の半健康化、あるいは半病人化といわれる現象でございます。医学が非常に進歩してきたから病人が減るだろうと思つたら、なかなかそうはいきません。

は病んでいくだろう、そして幸せは逃げてゆくだろうと、そのように考えるわけでございます。

そこで、人間の優先、科学の利用、それから生命の中心というものが要求されますけれど、そのもとをいうと、経済優先、科学万能、官能対応、これを克服するための目標が私はいま、死を越えた「静けさと、ほほえみ」そのものじゃないかと思つたわけでございます。しかし結局は、人々は死を超えなければいけない。宗教は生死の問題である。先ず死を超えて生きる。生きなければいけない。我々は死につつ—生きておりますし、生きながら死んでいるわけですね。実際の細胞の中で—例えば白血球は、一週間しか生きられず、これを補うために、我々の体内で絶えずつくられておりますね。そして二、三日しか生きられないリンパ球もあります。赤血球でも約二ヶ月ぐらいしか生きておりません。からだの中で、絶えず生まれ—絶えず死んでおる。健康なうちはすべての細胞の円満なリズムをなしているんですが、それでもその間、死と生がいれかわつておる。そういう意味で、我々は生きるためには、やっぱり本当に死を解決することが大切です。じゃどうしてこういう時代にですね、死を超えるか、死を克服するのか。

(未完)

ではどうして、それだけ医学が進歩するのにかかわらず病人が増えてゆき、一億の半健康化が進んでゆくかという、私はこれを根本的に考えなおさねばならん問題だと思います。それは何かと云いますと、私は価値観の墮落があると思います。即ちここに、根本的には価値観の転換、それを図らなければいけない。人生観というものをかえなければ、もつともつと人は病んでいく、悩んでいく、苦しんでいく、墮ちていく。それを救うものは、根本的には人生観の転換、価値観の転換が必要じゃないかと私は考えます。

では、どういう具合にその価値観を転換するかというと、大体こういうことです。

経済優先から人間優先へ

科学万能から科学活用へ

官能対応から生命中心へ

経済優先よりも先ず人間というものを先に考えること。そして、科学万能ではなくして科学を駆使する。決して、科学を否定、あるいは無視するというわけではなくして、科学をどう利用するかと、人間はその使い手である。官能対応というのは、目先の欲求充足ということよりも、先ず人間の命を中心にして考えて行くべきじゃないかと思つたわけです。で、こういうことを転換しない限りですね、人々

壁は見えずも

愛 義

行き当りつきあたりせし業縁の壁は見えずも光寂けき
称うれば十方菩薩おのおの南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏
もろもろの雑行自力消えはてただ念仏のみぞ残れる

雲のごとはかなきものか風のごと空しきものか人の憂ひ
の

茜さす比叡の峯の夕映のうつろみれば今日恙なき

なに故にかなしき運命人の世のことわり無きをうべなふ
べきか

他人は他人吾もまた吾かなしきはピエロの踊りその歌拍
子

わすらはん明日なくな瞬間のこの永遠をまことなら
しめ

九月十五日、敬老の日。家妻とつれだつて京都駅で湖西線の電車に乗り、琵琶湖畔の近江今津で国鉄バスに乗り換える。バスは秋晴れの三坂峠を越え、萩の花咲く山峡を走り、約一時間して若狭の小浜につき、病床にある蓮興寺のご住職・向島諦宣師を訪ねる。

諦宣師は、わたしどもの学生時代―知四明寮時代からの先輩で、爾来五十年近く交誼を辱けなくしてきた。そういえば花田先生とのご縁も、その他、田村実造、川畑愛義、宮地廓憲、長谷顕性等の諸兄との奇しき縁も、知四明寮にはじまる。

その諦宣先輩（齢すでに八十に近い）が、この春以来、衰弱して病床にあられるので、あるいは今生のお別れも近づいたかと、ひそかに案じながら伺つたのである。しかしお会いしてみれば、この八月初旬にお見舞いしたときとは打つて違って、このたびは血色もよく笑顔もあって、これならもういちど元気になっていただけること間違いなしといささか安堵して辞去する。

その帰途の、暮色の濃いバスの中で、ひそかに思う。今日は人の身、明日はわが身。家内と二人して、このように肩をならべて旅のできるのも、あといくばくぞと。

機縁熟し、昨春から拙宅で、聖人の「教行信証」拝読の会を、月に一回はじめてから漸く一年半になる。メンバーB教授とO教授と伝導院のS師。それにW師と私。

御講師はもとより親鸞聖人であられるけれど、それをもっともまには私にも当番があたるが、それは往年の学生時代の演習の時間とすこしも変りがなく、わたしのやらせていただいた場合は、そのあとで、これらの先生がたが、それぞれに補講してくださる。

なにしろ仏教学と真宗学と宗教学の第一線の学者が偶然揃っていて、しかもお東ありお西ありで、各々開法者であられるのが一層にありがたい。このあいだも、午后十時ちかくになって会がすみ、皆さんをお送りしたあと、茶の間

で、思わず私。今日もまことに有難い会であった、いや、勿体ない申し訳ないことであつたといえ、家内。ほんとうにあなたは幸せ。人生の晩年に、このような日がくるとは思いませんでしたワというので、そうなんだよ、先生がた、このような私に、ようもあきれもなさらんで、いやあきれはてても撰取不捨で、遠路、ようもこりることなしに

来てくださる。ともかく忙しい先生がたが四人も揃つてこられて、それぞれに教えてくださるなんて、勿体ない極みという、家内は背きながら、正典さんもご立派になられましたねという。それで私、そうなんだよ、もう正典さんというては相済まない。ほんとうは佐々木先生だよ、それにしても、ながいあいだ後輩扱いにして、ほんとに済まなんだと思うことありました。

ともかく憚慢（けまん）という文字は、わたしにピッタリである。憚（け）はおこたり怠けるということ、慢は自慢し慢心して威張るということ。だから憚慢とは、われいまだ得ざるに得たりと思うて慢心し、聞法向学の心乏しく怠け者であるというのであろう。そういえば、さいきん、岩本泰波先生の講演なさつたものの筆録等を、当の岩本先生から送っていただいて拝読し、再読し、三読して、その感―慚愧の念は痛切である。

わたしが先生のお名前を存しあげたのは、足利浄円師ご在世中で、あるとき浄円師から、埼玉大学に岩本さんという篤学求道の士があられると。先生が特に紹介されたのであるから、よほどの方であられるにちがいがなかったが、深く心にはとめていなかった。今にして省みれば、それほどに私は思いあがっていたのである。

ところが金子大栄師ご逝去の直後であつたか。（そう申せば、先生の御命日は十月二十日。本年は三回忌法要がつとまる。）たまたま大栄師の思想と信仰を讃歎し追悼する岩本さんの一文を拝見して、わたしは電撃にうたれたように心うたれた。そこには、他力廻向の大信心が自らにピカッと光っていたから。しかもその根底には、師への一途なる帰依と、御聖教を徹底的に拝読し聞思する姿勢と精神に貫ぬかれていたから。それでそれ以来、同氏のものを注意して拝見したが、拝見すればするほどに、わたしは驚き狼狽し、随喜して讃仰した。じっさい読んでは省み、読んでは念仏申して仏法を讃歎し、かつはわが身を慚愧した。多少むづかしい文章ではあるが、その一端を左に紹介してみよう。

まさに往生ということは、聖人のみ教えの核心であり、往生をとぐることを信ずるほかに、私たちのすくいはいはあり得ないのであります。それ故にこそ唯円は、「十余か国の

さかいをこえて身命をかえりみずして」聖人のみもとをたずね、「往生極楽の道」を問いたてまつっているのではありませんし、聖人もまた「往生の要よくよく聞かるべき」ことをさとされているのであります。

こころみに歎異抄全体をひもどいてみますと、往生の文字が三十六回も用いられております。それにたとえば、「浄土にうまる」「浄土へまいる」「報土に生ずる」等を加えますと、「往生」について、だいたい四十六回も語られていることになるようであります。これらの文の一つ一つはみな、往生ということが、私たち一人一人にとっていのちをかけて聞きひらかねばならぬ一大事であることを教えております。

(中略)

すでにいくたびも申しましたように、聖人において信心は、信樂開發の時刻(じこく)の極促(ごくそく)として述べられているのでありますから、信心の「とき」が一念であることは申すまでもありません。この一念は決していわゆる時間の流れを切りとった外から見られる時間ではなく、「無量劫の罪業」をこの一念に消滅し、尽未来(じんみらい)の逕歴(きょうらく)をこの一念に離脱する、大願業力のただ中なる現在であることもすでに明かなるところであります。(中略)

そしてこの信心が、「往生の信心」であるという重大事

を、私たちは決して忘れることはできません。なぜなら私たちの生命が、流転輪廻(るてんりんね)の苦惱の劫(とき)を脱して生気にみちた刻々の現在を成就することは、ただ至心信樂欲生我国という如来の願力に動かされるより外にはすべなきことであるからであります。

まことに往生とは、如来の本願力に生かされて力強く生き往(ゆ)く、私たちの刻々のいのちをあらわす言葉でなければなりません。度し難い現実の重荷を、そのままに罪業深重も重からずと軽じてゆく如来の「無窮の願力」を全身に受けいれる生き方こそ、私たちにおける往生という言葉の真実でなければなりません云々。(『同朋』8月号から抜粋)

なお先生は明治四十五年生。熊本の産。竜谷大学及び広島文理大を卒業。宗教学専攻。現在、国際商科大学教授

(編者急記) 九月三十日に向島諦宣師が亡くなりましたと西元先生から電話下さる。その数日前に御令弟の向島成諦様が急逝されました由、痛惜のきわみであります。遠く深い御仏縁に結ばれた在りし日の事ども走馬灯のように点滅去来し、ただお念仏申すのみ。

念 仏 詩 抄

木 村 無 相

称えぬ時も

和上お歌に

// 墮(お)ちかかる

身をばそのまま

救うぞと

ひまなくひびく

弥陀の呼び声——

ああ

弥陀の呼び声

弥陀の呼び声

ああ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

称えぬ時も

呼びどおし——

和上||禿頭誠師

称えつつ

和上おおせに

// 聞く聞くと言うて

称えることを忘るるは

大きなあやまり——

聞くととはナニを聞くぞ

念仏のイワレを

聞くのなり

御和讃に

真宗念仏聞きえつつ——

また御和讃に

// 弥陀の名号称えつつ——

198

称えつつ
称えつつ

六字のイワレ
聞くのなり——

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

だかれたままで

和上おおせに

〃やや子が母にいだかれて
お母アお母アと言う如く
ただナムアミダブツ——〃

ただナムアミダブツ

ナムアミダブツ

だかれたままで

〃~~~~~
シシ、ババたれて

ただナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

そのままに

〃ああ

大心海 大心海

ああ

御慈悲 御慈悲

ああ

不思議 不思議

狐そのまま

狸そのまま——〃

狐は狐そのままで

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

狸は狸そのままで

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

虚仮不実

和上おおせに

〃わが虚仮不実が
知られぬゆえに

法蔵菩薩の

お骨折りが

知られぬ——〃

五劫の御思惟も

わが虚仮不実のゆえ

永劫の御修行も

わが虚仮不実のゆえ

名号の御成就も

わが虚仮不実のゆえ

御和讃に

331

〃虚仮不実のわが身にて
清浄の心もさらになし〃

信ぜられないのは

和上おおせに

〃獲(え)られそうな

ものが獲られず

信ぜられそうなものが

信ぜられないのは

まだ機が高いからじゃ

橋慢のいただきに

法水はとどまらずと——〃

聖人お正信偈さまに

〃邪見・橋慢・悪衆生

信樂受持甚以難〃

この機が高うて

この機が高うて——

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

向島諦宣師を悼む

花 田 正 夫

昭和十三年十月

(九月)

二日夜、西元先生から電話で、三十日に向島師が亡くなられ、三日に葬儀とのことと、その数日前に御令弟の向島成諦様も逝去されたお知らせをうけました。私は耳を疑うばかりであった。というのも八月二十五日付で、成諦様からお手紙をいただき、

兄事、四月学校（京都産業大学）を退職いたしました途端、いろいろの病気が一時に出ました恰好になり、先月末衰弱も甚だしく、長男の知合いの院長の敦賀市立病院へ入院加療につとめました結果、お蔭様で体力がやや恢復いたし、去る十九日退院して自宅療養を続けています。重いリュウマチスと狭心症が主な症状ですが、自分で起きる事もできません、食事をはじめすべて人手を借りねばなりません、医師も寝たきり老人になることを案じています。昨夕も一寸見舞に参りました処、自由の利かぬ手を見つめながら、花田さんから丁寧にお見舞までいただいでいて、そのうちに御礼を書きたいと思つていますが、当分書けそうにない。お前から事情を申述べてお

七月

ことわりして厚く御礼を申し上げてほしい」とのこととございませぬ。

今頃になって御礼でもございませぬが、兄もこんなに永くなると思つて居なかつたと存じます。事情お汲み取り下さいまして御海容下さいませ。

なお先日の教育テレビの放映なつかしいお姿に接しながら有難く聴聞させていただきました。同行も喜んでいました。云々。

八月二十五日

代筆 成諦

とありましたが、西元先生が御見舞された時もお元気であったとの由で、安心していました矢先とて、絶句してしまいました。

今日三日、厳かに葬儀の執行されていることをお偲び申しながら、御令弟の急死が衰弱されたお身体、ことに心筋硬塞に影響されたことであろうと、念仏裡に思いめぐらしております。

私の京大時代の先輩で、御信交を頂き始めましてから

五十年近くなりました。粗野で乱暴者の私をよく理解して下さつて、おおらかなところで包んで下さり、世事にくだらぬ私を何かにつけてお護りいただいたことのあることを思い、何一つ御かえしもできませんままにお別れ申しましたことをおわび申すばかりであります。御令弟の成諦様もことに親しくさせて頂き、永らくお会いも申さず、住む地は異にしておりながら、いつも隣り合せて住んでいられるような思いがしていました。

先年、松本解雄様を失い、今また向島御兄弟との別離、足ばやに浄土に還えられて、彼土から照覧下さることではありませんが、凡愚の身には恩愛の情たちがたいものがあります。かつて、母と兄二人を續いて亡くしました時の腰折

愛別のかなしみふかし 深かけれど

わがみほとけの涙きわなし

を繰りかえし誦しながら、未通る弥陀仏の矜哀の大悲を仰ぎ、お念仏にかえらせていただくばかりであります。

私が文字通り裸一貫で京都に移りまして以来、仏教学の羽溪了諦教授の主宰された知四明寮の寮友の方々と親しくさせて頂いただけでも、松本様と向島師のおかけでありました。松本様は青森県の寺院出身の方でしたが法学部を卒業されて、どうもそれだけでは心が満足せられず、哲学

科に再入学され、真面目に求道せられた人ですが、向島師は叔父にあたられる遠山諦観師と同じく羽溪了諦先生の感化をうけられて、純信の道を辿られたのであります。幸に私もその仲間に加えて下さり、或は共に池山栄吉先生のお宅を訪ね、又は御講話を同聴し、更に、有志の方々と月一回の信の集いを続けましたが、当時御縁のあった方々は、今も夫々の業道を辿られつつ、念仏の中に互に呼びかけ合っております。そうした流れの根源に、向島、松本両師が居られるのであります。

御健康の都合で大学を退ぞかれ郷里で御令弟と共に、御門徒を中心に信の輪のひろがることと御期待申しておりましたのに、積尊と同じお年齢になられた矢先、お別れとなりました。しかし身をもっておのこし下さった法水は、いよいよこれから随時、随所に湧出して枯渴の世をうるおし續けて下さることを信じ、心から御礼申上げる次第であります。

ほどなく私共もかえらせていただく浄土であります。御両所がそこよるごび迎えて下さることでありましょう。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

五十三年十月三日

稿了。

撮取不捨

転居

運送屋は北白川の本通りで、近くに主人の家がありました。運送屋の店の奥に三畳の室があり、私はそこに寝ることになりましたので大変嬉しかったです。北白川は京都大学に近く、学生の下宿の町でしたので、仕事は下宿の引越し荷物の運搬、小荷物を郵便局へ送りに行くこと、京都駅へ手荷物を受取りに行くこと。休暇になると柳行李を駅に出しに行って切符を買うことなどで、大きな仕事でも大阪までの引越しが私が勤めていた二年間に三度ありました。

文科の学生は沢山書物を持っていましたが、法学部の学生は少なく、六法全書と外に法律の本が四、五冊とノートが四、五冊と夜具と机でした。京大教授の転宅も三度しました。初めは応用化学の北先生、次に文学部の澤潟先生でした。その先生は北白川小学校の北方に小山がありますので車に荷物を積むのに正午になってしまい、食事を戴き、昼休みに中央公論の読みやすい所をと思ひ頁を操っており

んは女子二人連れて主人の家に帰っておりまして、家ではいつもめ事がたえず、時々私にかわるがわる愚痴を云いに来られました。その家では年に二、三回、厄除けのために御代参という婦人の方が来て護摩を焚き、後になると釜を鳴らすのです。これは密教で、火をたいて仏に祈るのだそうでした。真宗ではそんなことはしません、この家に諸々の教が入りまじっていたのです。その主人は革命家のシンパでしたので、時々二階で集会がありましたし、その同志の学生の手紙を届けに行つたものです。河上肇先生の愛弟子で岩田義道という京大大学院の学生が事務をして居られた京都西九条小作組合に手紙を届けに行きました。或日、手紙を持って組合の戸を開けようとする、中年の人が私の手を取り、入れないようにして警察手帳を見せて、大石橋の交番まで連行され、休息所で私の帯を解き、落ちた手紙を取り上げ、そのまま七条署に留置され、翌日は下鴨署に送られ、色々聞かれますが、何も知らないから知らぬというと殴打され、その外に六角鉛筆を指と指との間にはさみ、指先を締めくり、鉛筆の先をビリビリンと弾くから痛くてたまりかねましたが、知らないものは知らないと言ふより返答の致しようもなく、その日の夕方警察署から出してくれました。主人も下鴨署に留置され、翌日に帰りました。

石田 十九三

ますと、中から十円札が一枚出てきましたので、先生にお届けすると大変喜んで下さいました。先生が大島の着物に袴をつけ、校内を颯爽と歩いておられる姿をいつも見えていましたから、今の先生を見て、嬉しい時は私共と変らず喜ばれるのだなと感じました。

三度目は山谷省吾先生の転宅の時でした。恩賜の銀時計がなくなつたと申され、怖い顔をなされ、主人と私が盗んだかのような言い方でしたので私も主人も嫌な思いをしたものです。転宅先に着いた時、その時計は大学生のポケットにありました。学生は一度恩賜の時計を下げて見たかったのでしょう。私がキリスト教を聞くようになってから山谷先生の講演を聞きに行つたことがありました。その日の先生は、天の神様の生れ変られたような有難いお話で、愛とか信仰とかを話されましたが、私は先生から懺悔のお言葉を聞きたかつたのです。

主人の家も浄土真宗の家でしたが、先妻は男の子一人を生んで亡くなられ、後妻を迎えられました、主人の妹さ

その翌年、朝八時頃、京都駅に荷物運搬に出かけた時、吉田神社の横の二階建の家の下宿街で、二本松に来た時、多くの警官が下宿をとりまいて居る。学生達は大屋根に登って瓦を投げるのやら、二階の窓から出て瓦をめぐって投げるやらでした。警察が撃つたのか、学生が撃つたのかピストルの音もして居りました。この日の午後帰ってききましたのでは、大方の革命家は逮捕されたとの事でした。この闘争は後に三・一五事件と新聞にのりました。大学を卒業しても就職出来ない時でしたので、革命家に多くなつたのでしょ。

私の心やすくして居た学生は、母と二人だけの生活でしたが、遠く沖繩の女子師範に行くように教授から勧められて勤めるようになったとのことでした。普通大学卒で七十円か七十五円の初任級でしたが、沖繩では八十円の初任級だから四、五年そちらに行き、後々の給金にもかかわりがあるの出て行かれました。

その頃北国では冷害と不景気のため娘を売って生活する始末でした。北陸では娘は紡績に働きに出て、私の級友はほとんど若くして死んでしまいました。田舎の海岸で空気のよい所で育つた者には余りにも空気の汚れた紡績や、大織機工場では抵抗力がなかったのでしょ。

革命家の人達が資本家の横暴に抵抗したことは、私は今

もって正しかったと思えますが、議員には資本家よりの金で当選した人が多いので、議会で治安維持法が通過し、それらの人達は根こそぎ逮捕され、取調べ中に死亡した人も沢山ありました。知名の人に小林武治、岩田義道氏もおられました。

私も賃金を少しでも多く取りたいので、色々調べてみますと、馬車を引くのがよさそうなので、伝手を求めて馬車屋に行きました。その親方は石川県の人で二十頭ほどの馬がおりました。馬に乗ったことはあるが、馬車は初めてですと申しますと、親方は、馬を引こうと思って生れた人はない、すぐに一人前の仕事ができる様になるよと云って雇ってくれました。宿も親方の持家で、食事も親方の家ですることになりました。馬は人間の四、五才位な知恵がありますから、新米の引手を馬鹿にして思うように車を引いてくれませんが、一人前の人の六、七割しか仕事が出来ませんでしたが、段々馴れて仕事も一人前になりました。馬も可愛がってやると馴れて悪戯をもしました。或時仕事が終わって家に帰ろうとしています私の袴上をくわえて、空中に釣りあげました。叱るとはなし、また少し行くと私の袴上をくわえて釣りあげますので、私は馬の後になって手綱であやつりました。そのことを隣りの人に話すと、馬が段々と君に馴れて、君の云うことを何でもするようにな

ともしび

冬 扇子

罪障を功德の体となしたまう御名こそおのがいのちなりけり 足利 淨 円

誰しも自分ではよいつもりで行動していることが、いつの間にか煩惱に汚され、ゆがめられて、自他共に損ねている。克己心の大切なことは幼い時から教えられており、自分自身にもつとめてはみるものの、無意識に働く動物的利益己心に破られてしまう。こうしたことの繰り返しから罪障の重さに沈みこんで浮ぶ瀬もない身におちる。

私が学生時代「泥の中、誰が植えたか蓮の花」と教えられたが、幸にもこの煩惱に濁り汚れた身に、ふとお念仏が浮かんでくる。するとそこに親鸞聖人のみ声が「ただ念仏して弥陀仏のおたすけをこうむるんだよ」と聞こえ、身辺に光がさし、自然に道が開かれてくる。

まことに御名こそは、罪障の深重な私のいのちであり、生き杖である。そこに「波聞道無く、道縦横」といわれることもうなづけるのである。

一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり

歎異抄 五章

る證しだと教えられ、安心しました。

この年は今上陛下の即位式が京都御所で行われるので、新築、又は改築が多く私共も毎日多忙な日が続きましたけれど、その後は仕事が無くてこまったものです。親方は三井物産の石炭運搬を受負ったのもそのためでした。

親方の家も浄土真宗でしたが、御祖母様が仏壇に礼拝して居られても、他の家族は無関心でした。真宗の教は、このままの救いとか云って、行も願もいらないと聞いていましたので、私は私に出来る教は無いかと思うようになりました。

(続く)

木と火

木に火の性有りといえども、その火その木を焼くことを得ず、別の火をもて木を焼けば即ちやけぬ。この火と木中の火と別体の火に非ず。

われらに仏性の火ありといえども、われと煩惱の薪を焼滅することなし。名号のちからをもて焼滅すべきなり。

最近、人間疎外、都会の孤独、親子の断絶、人を見ては泥棒と思えの声をしきりにきく。これらは人と人との間のことであるが、これにくらべて仏様は、一切の生きとし生けるものは互に父母兄弟であると呼ばれている。

初めの間は私にこの言葉があまりに広大すぎて、びったりと感得出来なかったが、ほろほろと鳴く山鳥の声に父母を慕われた行基、雉子の声に父母を想う芭蕉の句にふれ、私自身があまりに人間中心の狭い世界に閉ざされていることに気づき始めてきた。

個人的利己心が人々を傷つけるように、人間中心の利己心が自然を破壊し、生物を絶滅させていく。しかし天に向って唾する者は、やがてそれが自分の頭上に落ちてくるのは必然である。仏様にはこうした人間の生きざまがどんなにか痛ましく、悲しくうつることであろうか。



あとがき

本年の一道会には、向島諦宣師の追悼が加えられ、それぞれ、面々に師を憶念される集いとなった。

北岡行男さんがお父さんと池山先生を訪ねられ、嵐山に散策された時、先生が老椽にまばらにのこる紅葉を指さされて、我々も同様の身、とつぶやかれたことが、お父さんの心にしみこみ、一心に聞法せられて念仏者となられて余生を送られたとおききしている。

向島師と最後の御縁は一道会であった。羽溪了諦先生の臨終のありのままを念仏裡に語られ、念仏者の生活は、京都のつづれ織りに似て、美しい表と、糸屑のままの裏が続いて、身命終してはじめて美しい仏があらわれることを可成り熱をこめて述べて下さったのを覚えてゐる。今や宝林壇上から微笑裡にご照覧下さらんことを。

○信仰とは信ずる人とお会いすることである、と池山先生は仰言つて、自分の罪悪深重、煩惱熾盛に驚く人には、どうあつてもお会いせずにはいられないのだと御自身の心の推移を述べていられる。

川畑さんは、池山先生に導かれ、しかも医師として居を先生のお宅の近くにうつさ

れて、最後まで看護して下さっただけに、からだ全体に先生の徳光を浴びていられるおもむきに襟を正さしめられる。

西元さんの信の旅は、善財童子の求道物語りの再現で、会う人、読む書の中に、よき教を味寄せられての法悦である。近來特に老懶の身には、愧じ入るばかりである。

木村さん、はじめて富山、新潟の旅を続け、発作のきざしがある毎に、薬でおさえながら二週間の旅をせられた由、氷上乱舞のあやうさを私共は感ずるけれど、一期一会の大切な旅だった由。

石田さんの人生遍歴の旅は、法のさかな郷里を離れて業縁のままに紆余曲折、その間に眼に見えぬ大きな手にまもられ続けたのである。その時、その場の正直な表白、教えられ、省みさせられることが多い。十月十九日に、北米サンジョセの別院の輪番をしていられた北条恵実師夫妻を迎え、廿日には、北米の開教使、戸田師を迎えた。北米の仏教の現状と将来のことなどお聞きし、談合。

又、東京の柏樹社の増田営業部長の來訪をうけ、「歎異抄」わが身読記」を再版下さる由、ありがたいことであつた。

〔御案内〕

○ 毎月第一、第三日曜、午後一時半。一道会例会、

南区駈上町二の八六。鬼頭氏宅。

市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角。地下鉄、新瑞橋下車。

○ 教西寺、法話会。昭和区小核町三丁目

四。毎月二十四日、午前・午后。

市バス、御器所通り、又は北山下下車。

地下鉄、御器所通り下車。

○ 蓮光寺、修道会。毎月七日午後一時半。

(但し日曜を除く) 尾西市三条板倉。

名鉄、新一官駅よりバス。西三条下車。

定価 半年 七〇〇円(送共)
一年 一四〇〇円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正 夫

電話八二一〇七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷人 坂部 光雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番

郵便番号 四五七